

ライフストーリーにみる「郷里」との繋がり —ハワイにおける沖縄系郷友会「羽地クラブ」の成員を事例として—

山里 絹子¹⁾, 山里 晃平²⁾

“Hometown” in Life-Stories: From a case study of Okinawa Haneji Locality Club members in Hawai'i

Kinuko MAEHARA YAMAZATO ¹⁾, Kohei YAMAZATO ²⁾

要 旨

沖縄県は「移民県」と称されるように、太平洋戦争前後、多くの人々が沖縄からハワイ、北米、南米地域等へ移住した。移住先のハワイでは、沖縄県系人が相互扶助などを目的に同じ市町村出身の人々と郷友会を結成し、その活動は現在まで続いている。沖縄系の郷友会は時代と共にその活動を変えてきた。羽地地域出身者で結成されている現在の羽地クラブは、1928年に旧羽地村出身者によって羽地村人会として結成された。戦後、母県沖縄での市町村合併により旧羽地村は名護市の一部となったが、1966年に現在の羽地クラブに名称を変え、活動を続けている。これまでハワイの沖縄系の郷友会に関する研究は、郷友会での相互扶助の役割や郷友会が維持されてきた要因、さらに現在の郷友会が多様な機能を持つようになった経緯などを分析している。しかし、これらの研究は一世、二世もしくは帰米二世を対象にし、ハワイにおける郷友会との関わりに焦点をあてている。現在のハワイの沖縄系の郷友会の成員は郷友会とどのように関わり、それと同時に母県沖縄の郷里とどのような繋がりを持っているのだろうか。本研究では羽地クラブに焦点をあて、クラブの活動への参加観察と成員へのインタビューを通して得られたライフストーリーをもとに、現在の郷友会に所属する二世、三世、そして次世代の人々が、家族の歴史や個人的な経験をもとに、郷友会との関わりを続けつつ、郷里との繋がりを持っていることを明らかにした。

キーワード：移民、郷友会、郷里、ライフストーリー、ハワイ

Abstract

The primary goal of this paper is to illuminate how members in an Okinawan locality club in Hawai'i maintain ties with their hometown in Okinawa while engaging in club activities in Hawai'i. The main focus for existing studies on Okinawan locality clubs in Hawai'i has been on the first and second generations and how mutual support played an important role for them, and how club maintenances and functions became available for these generations in Hawai'i. While these studies have contributed to the understanding on how Okinawan locality clubs in Hawai'i were formed and how club activities and membership engagements changed in the course of history, they have failed to inquire into whether or not club members of different generations have maintained ties with their hometown in Okinawa while engaging in club activities in

¹⁾ 琉球大学法文学部国際言語文化学科 〒901-0213 沖縄県中頭郡西原町千原一番地 University of the Ryukyus, Faculty of Law and Letters, Department of Language and Culture. 1 Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, 901-01213, Japan

²⁾ 名桜大学総合研究所学際的共同プロジェクト「沖縄北部地域出身の海外沖縄移民に関する総合的研究」研究協力者 〒901-2424 沖縄県中頭郡中城村南上原191-2 Meio University, Research Institute, Interdisciplinary Joint Research Project, Research Assistant. 191-2 Minamiuebaru, Nakagusuku, Okinawa, 901-2424, Japan

Hawai'i. Through participant observation and life-story interviews which the authors conducted in Hawai'i in February 2014 and March 2015, this paper shows that the second, third and fourth generation of Haneji club members have maintained ties with their hometown in Okinawa while engaging in club activities in Hawai'i. Each generation presents different levels of ties and engagements which are characterized by their family histories and personal experiences.

Keywords: Migration, Locality Club, Hometown, Life-Story, Hawai'i

はじめに

沖縄県は「移民県」と称されるように、太平洋戦争前後、多くの人々が沖縄からハワイ、北米、南米地域等へ移住し、その数は人口比で日本本土より多かったことで知られている¹⁾。移住先の社会において、一世の人々の多くが、同郷人の相互扶助を目的に、市町村や字をベースにした郷友会を結成した。郷友会の活動は現在も、移民地で生まれ育った三世や次世代を担う人々によって維持されている。本研究は、ハワイにおける沖縄系郷友会の一つである「羽地クラブ」に焦点をあて、羽地にルーツを持ち、現在クラブに所属する人々がどのようにクラブと関わり、また祖先の故郷である羽地とどのような繋がりを持っているのかについて考察する。

海外沖縄移民に関する研究は、琉球大学の石川友紀氏によって始められた。石川は移民名簿をもとに海外へ移住した人々の特徴や移民輩出の要因や背景および移住先での職業構成や移住分布などについて、地理学の分野から詳細な研究を行ってきた²⁾。また、近年では、文化人類学や社会学の分野で、移民先での現地調査にもとづいた移民やその子孫たちの生活や経験および彼らのアイデンティティの形成や変容に焦点をあてた研究がある³⁾。また、文学の分野においても研究が進んでいる⁴⁾。さらに、学術分野以外にも、四年に一度沖縄県で開催される世界のウチナンチュ大会等の海外沖縄移民に関するイベントを通して、現在の沖縄社会においても移民の歴史や経験についての理解は深まりつつある。各市町村レベルでも、各市町村の市史編纂委員会がまとめた資料や書籍により、各市町村から移民した人々、特に一世の移住地における経験についての貴重な記録がされてきた⁵⁾。しかし、海外における市町村をベースにした郷友会の歴史や郷友会の成員の活動についての研究は十分ではない。特に、移住先で生まれ育った二世、三世や次世代を担う若者達がそれぞれどのように郷友会と関わり、母市町村である郷里とどのような繋がりを持っているのかについての調査はほとんどない。

本稿では、沖縄県において、最も多くの移民を輩出した、いわゆる「移民村」と呼ばれる市町村のうち、沖縄県名護市旧羽地村からの移民に焦点をあて、1928年にハ

ワイで結成され現在も活動を続ける「羽地クラブ」を取り上げる。旧羽地村は、沖縄県国頭郡の一村であったが、1970年に名護町、久志村など近隣する町や村と合併し名護市となった⁶⁾。海外に移住した人々の出身地である市町村は、多くの変化をしてきた。そのような中で、移住地で生まれ育った二世や三世以降は、どのようにハワイの郷友会と関わり、また郷里との繋がりを持っているのだろうか。本研究は世代や年齢、ジェンダーの異なる5名のライフストーリーをもとに考察する。

沖縄からの海外移住者やその子孫に焦点をあて、彼らの郷友会との関わりや郷里との繋がりについての考察をするにあたって、ディアスポラの概念は有益な視座を与えてくれる。ディアスポラ (diaspora) という用語の語源は、ギリシャ語のディアスペイロ (die-spear-o) という語で、「異なる様々な方向に種をまき散らす」という意味があり、かつてはユダヤ人などに代表される迫害や国外追放などによる非自発的な離散を意味するものであった。近年は、国境を超える人の移動が活発になるにつれ、郷里からの自発的および非自発的な出移民に焦点があてられ、彼らの国民国家に縛られない生活や文化、また自己意識の形成について理解するための視座として用いられている⁷⁾。Robert K. Arakaki (2007) は、明治政府による廃藩置県後、日本の近代化の体制に組み込まれていく中で海外移住が行われた沖縄の固有の歴史を踏まえ、沖縄からの海外移民の経験もディアスポラの概念を用いて考察する重要性を示し、「二重のディアスポラにおける二重のマイノリティ」(Arakaki 2007: 26) という特徴があることを指摘している。ディアスポラの視座は、ホスト社会への単線的な同化の経験ではなく、移住者やその子孫たちが出身地である郷里と繋がりを持続しつつ、越境的な生活や文化、また自己意識の形成をしていることへの理解を与えてくれる。本稿では、移住先で結束される郷友会や郷里との繋がりやディアスポラ的な行為として捉え、沖縄系海外移住者やその子孫のライフストーリーから郷友会との関わりと郷里との繋がり多様性を明らかにすることを試みる。

ハワイにおける郷友会の存在は、沖縄からの移民に限定されるものではない。ハワイは、1835年以降、米国本土から渡ってきた白人によってサトウキビのプランター

ションが作られ、労働力として、中国、ポルトガル、日本、韓国、プエルトリコ、フィリピンなど、様々な国や地域からの移民を受け入れた歴史があり、現在多民族社会が形成されている。それぞれの国から来た移住者たちは、新しい土地における生活を相互に扶助する目的で、同じ出身地域をベースに郷友会を結成した。数少ない研究の1つであるOkamuraの研究(1983)は、ハワイのフィリピン系郷友会に焦点をあて、郷友会が維持される要因について論じている。Okamuraによれば、1920年代にプランテーション労働者としてフィリピンからハワイへ移住した一世は受け入れ社会のハワイで困難に直面する中、社会的適応をお互いに支援するための郷友会を結成した。一方、その郷友会は1965年以降にフィリピンからハワイに移住してきた若い人たちにとって、リーダーとして自己を確立する場としての役割を担うという色彩が強くなった⁸⁾。その背景には、彼らにとって、マジョリティー社会においてリーダーシップを発揮することの必要性和困難さがあり、Okamuraの研究は、ホスト社会における困難さが郷里との繋がりを強く持つことになっただけでなく、郷友会との繋がりを持つ意味が世代によって多義であることを示す貴重な研究である。ハワイにおける沖縄の郷友会でも同様な特徴がみられるだろうか。

本稿では、まず、沖縄の郷友会に関する先行研究を整理する。次に、本研究の調査方法であるライフストーリーについて説明する。さらに、羽地地域からのハワイへの移民の歴史とハワイの羽地郷友会の歴史について時系列にまとめ、その変容過程の特徴を示す。最後に、羽地地域にルーツを持つ5名のライフストーリーを考察し、郷友会との関わりや母村との繋がりについて分析する。本稿は、名桜大学総合研究所学際的プロジェクト「沖縄北部地域出身の海外沖縄移民に関する総合的研究」の研究助成により実施した現地調査をもとに考察するものである。

1 先行研究－沖縄の郷友会に関する研究を中心に－

これまでの沖縄の郷友会に関する研究には、沖縄県北部地域や離島地域から都市地域へ移住した人々によって結成された郷友会に焦点をあてたものがある。また、出稼ぎ移民など県外や国外において結成された郷友会に焦点をあてたものがある。それらの研究において、郷友会が結成された背景および郷友会の持つ社会的機能やその変容について分析がなされてきた。

まず、前者に関する先行研究に、1950年代後半から1960年代前半にかけて、沖縄県内都市部で結成された郷友会の研究がある(石原1986)。石原昌家氏は、沖縄本島における米軍の本格的な基地建設が進められ、労働力の需要が高まったことを背景に、離島や沖縄本島北部地

域から中部や那覇といった中心部に移動した人々が、相互扶助によって、偏見・差別を克服し、自立した生活基盤を築くために郷友会を結成したことを指摘している⁹⁾。石原は、「離島・山村僻地からの出稼者に対する偏見・差別意識と他所者意識も加わり地域差・個人差はあったとはいえ彼らの生活基盤形成は困難であった」(石原1986: 15) ことが結束力を生む要因になったと記している。また、戦後、集落が丸ごと軍事基地として米軍に接收されたことを理由に、他地域に移住しなければならなかった人々が「存在証明」として郷友会を設立したことも指摘している。石原は、郷友会に所属する個人々の生活史をもとに、郷友会の組織の結成過程や組織の必要性について捉え、郷友会の活動内容には、伝統文化の継承や出身地の選挙行動も含まれ、「都市の中のムラ」を形成していたことを詳細に分析をしている。1980年には、那覇近郊だけでも300に近い数の郷友会組織が存在しており、琉球新報が那覇近郊や中部に存在する約190の郷友会を紹介している¹⁰⁾。

一方で、ハワイの沖縄系郷友会に関しては、Kimura (1968)、Adaniya (1981)、川和 (2006) の研究が最も詳しい。これらの研究は、郷友会が維持される要因や郷友会の歴史の変容について分析している。Kimura (1968) は、プランテーション労働者として沖縄からハワイへ移住した人々が、より良い職業に就くためにホノルル都市部に移動した1920年から1930年代にかけて、市町村や字をベースにした多くの郷友会が結束されたことを指摘している。沖縄からハワイへの移民は、日本本土からのハワイへの移民から約15年遅れた1900年、つまり1879年の琉球王国の滅亡から、わずか20年ほど経って始まった。異なる言語や習慣により、ハワイの沖縄系移民は、他府都道府県出身の移民からは「劣等な外集団 (inferior out-group)」(Kimura 1968: 283) として扱われた。そこで、同郷人同志の親睦と相互扶助のため、郷友会を結成した。戦後、沖縄系移民の社会的地位は向上し、日系社会およびハワイ社会においてもビジネスや政治等の分野において重要な役割を担うようになったが、依然として郷友会が維持されたのは、一世が二世に様々な援助を与え、二世が責任のあるリーダーを担った時には、移民のパイオニアである一世を敬い彼らの伝統を継承しつつ、様々な年間行事や催しを取り入れ、結束を強めていったからである¹¹⁾。また、市町村や字をベースにした郷友会が、1951年に設立されたハワイ沖縄連合会¹²⁾の下部組織となり、「ハワイの沖縄系社会組織の基本単位」(Kimura 1968: 285) として位置付けられていることも指摘された。Adaniya (1981) は、母県における郷里の変化によって、ハワイの郷友会も変容し続けている様子を指摘している。例えば、市町村合併などで、隣接する村が合併し市となった場合、郷友会同志を合併

させるのではなく、「村人会」から「クラブ」と改称し、会員の構成や数は変えず、旧市町村の独自の境界が維持されてきたという。

Kimura (1968) や Adaniya (1981) の研究から30年近く経った現在も、市町村ベースの郷友会は、ハワイの沖縄系コミュニティにおいて重要な機能を担っている。毎年、沖縄からハワイへ移民した方々とその子孫たちで構成されるハワイ沖縄連合会の主催で、オキナワンフェスティバルが9月上旬に開催されるが、ここでは沖縄の伝統芸能の披露や沖縄料理や物産の販売が行われ、地元の人々や観光客を含む約5万人の人が訪れ賑わう。その運営の主な担い手である市町村クラブ単位でボランティアを募り、フェスティバルの運営や各展示・ブースでの販売等を行っているのである。

川和 (2006) は、文化人類学の調査方法であるフィールドワークやインタビューから、現在における郷友会の多面的な社会的機能について考察した。糸満市クラブの歴史の変遷を調べ、特に、1990年代のクラブについて、沖縄にルーツがなくても、繋がりのある人々の新規入会を促し、同郷人だけに限定されないネットワークの構築を試みるようになったと指摘する。川和は、Kimura (1968) の研究が示したように、郷友会は、「故郷への想い、つまり民族的な集団意識を活性化する場」(川和2007: 70) であると同時に、民族性に限定されない「共同性を育む」(川和2007: 70) コミュニティーとして存在していることを指摘した。つまり、郷里にルーツを持たない場合でも、郷友会会員と親しい関係にある人々が流動的に凝集し、コミュニティとして郷友会が維持されていると分析している。

これまでの研究においては、一世や二世そして帰米二世¹³⁾の事例によって分析がなされてきた。郷友会に所属する二世、三世、また次世代を担う若い会員は郷友会とどのように関わり、沖縄における母村の郷里とどのような繋がりを持っているのだろうか。本稿では、ハワイで結束された「羽地クラブ」の歴史的概要を踏まえた後、クラブに所属する5名のライフストーリーに焦点をあて、これらの問いを明らかにしていく。

まずは、名護市史編纂資料の羽地に関する書籍や資料、ハワイで収集した1980年代のハワイ日系新聞記事をもとに羽地からハワイへの移民の歴史を概観し、またハワイで結束された郷友会の歴史についてまとめる。1970年にハワイの羽地クラブ会員によって作成された会誌も参考にした。その会誌には、会則や活動の内容、会員の名簿が綴られている。当時のクラブ活動を知ることができ、現在の活動との比較や、会員の変化などについて考察することができる。

2 ハワイにおける羽地郷友会の歴史

(1) 羽地地域からの移民の歴史

ハワイへの移民を初めとし、沖縄県から海外への移民は1900年に始まった。沖縄からの出移民要因として、石川 (2005) は人口過剰による経済的要因、土地制度の改革による共同体規制の崩壊、移民啓蒙家および先駆者の出現、血族的血縁的紐帯が強い社会組織、徴兵の忌避を挙げている。1879年に沖縄県の廃藩置県が実施され、地割制度の廃止と新しい土地整理法の発布により、農地の個人所有化が始まり、より良い生活を求め、自由に移動することができるようになったことが、海外へ移住する大きなプッシュ要因であったことが指摘されている¹⁴⁾。

沖縄の中で、移民を最も輩出した地域のことを「移民村」と呼ぶが、中城、西原、金武、羽地がこれにあたる。『名護市史 本編11 わがまち わがむら』(1988) によれば、羽地地域は、水が豊富で早くから水田開拓が進み、琉球王朝時代から米を多く生産していたことでよく知られていた。ハネジターブックワ(羽地田袋)と言われ米の栽培で知られていたのである。羽地大川は時に台風などで氾濫を起し被害を多くもたらしたが、蔡温が羽地大川を改修し被害は治まったと伝えられている。1970年に名護町などの広域合併で名護市になった。サトウキビ栽培のために「ハネジターブックワ」も畑地に変えられ、山岳地帯は開墾され、パイナップルが植えられるようになった。

羽地は、沖縄県の中でも海外移民の極めて多い地域で、その中でも特に海外移民が多かったのは、真喜屋、仲尾次、呉我、鏡平名であった¹⁵⁾。石川 (1989) によれば、羽地村の移民は、1904年のフィリピン、メキシコ、ハワイへの移民に始まり、1908年からはブラジルへの移民が開始された。1908年の海外在留者数および地元の送金額を見てみると、移民先国は8か国にも達し、ハワイは228名でこれは羽地村全体の56.7%にあたり、送金額も1万2千円と一番多かった(石川1989:13)。『親川郷土史』(1962) には、旧羽地村の親川公民館が海外移住者からの寄付から作られたものであると記録されている。

戦後の羽地地域からの出移民は、ブラジル、ボリビア、アルゼンチンなど南米への移民が多かった。とりわけ、ブラジルへの移民は、沖縄県の中で羽地村が一位である¹⁶⁾。移民村である羽地地域に関するこれまでの研究には、ブラジルに焦点をあてたものが多い。例えば、仲尾次出身者の事例をもとにしたブラジル移民の出自に関する平敷 (1977) の研究、ブラジル移住生活体験者とのインタビュー調査をもとにした移住者に対するイメージを考察した棚原 (1977) の心理学的研究がある。また、村落の階層分化から移住者の形成を読み取る波平 (1977) の研究やブラジル移民経験者一世の経験を記録した石原 (1977) の研究等がある。

本稿で焦点をあてる羽地地域からハワイへの移民の数は、沖縄県全体において6位であり、1位は中城村であり、金武、西原、具志川に続く6位である¹⁷⁾。名護市に限定すれば、明治時代後期から1939年まで(米国移民禁止法)に名護市からハワイへ移民した移民数は、羽地地域が最も多く、全体の47.2%、次いで名護地域21.6%、屋部地域12.9%、屋我地地域10.9%、久志地域7.4%となっている。その数は、1361人にも上り、名護市からの海外移民の移民全体の20%を占め、ブラジル(35%)、ペルー(20.5%)に次いで第3位を占める¹⁸⁾。

(2) ハワイにおける「羽地クラブ」の歴史と活動

ハワイにおける羽地クラブの歴史や現在の活動について、ハワイ地元日系新聞の記事や1970年の羽地クラブ会誌、さらに2014年新年宴会の様子をもとに考察する。*Hawaii Pacific Press*紙の1978年2月1日付の記事には、羽地郷友会の歴史についての記述がある。その記事によると、1928年、平良牛助、宮城源榮、親川喜七牧師の3名によって結成準備が進められ、同村出身の25世帯が、ホノルルで「羽地村人会」を結成したという。クラブの創立目的は「村人間の関わりを深めること」で、毎年新年宴会を開くこと、ピクニックを催すこと、不幸ごとがある時は皆で助け合うことを会則にした。初代会長を務めた親川喜七牧師によると、会員集めは簡単ではなく、当時は電話がある家がなく会員を集めるために各自宅を訪問したという。

羽地郷友会の活動は、母県沖縄における市町村合併等による郷里の変容やハワイ・北米の歴史的状況の影響を受けた。1928年から1941年の間は、「羽地村人会」として活動したが、1941年に太平洋戦争が始まり1946年まで活動を停止した。1947年から活動が開始され、1949年からは郷里の屋我地が羽地村の一部になり切り離され独立した村となったため、羽地と屋我地を組み合わせ「羽屋村人会」と改称し活動を続けた。1950年には羽地と屋我地がそれぞれ独立し活動するようになった。1970年に作成されたクラブ会誌には、1966年からは「羽地村人会」から「羽地クラブ」へと改称していることが分かる。現在の沖縄においては、羽地村は存在せず、名護市の一部になっているが、ハワイでは独立した郷友会としての活動を維持している。

郷友会にはどれくらいの会員数があったのか。1978年1月に、創立50周年祝賀会を兼ねた新年宴会が開催されたが、会員世帯家族約300人が出席した様子が記録されている¹⁹⁾。1990年の新年宴会には、200名の参加者があり、会員である26名の一世代に対し、感謝の意が示された。1970年のクラブ会誌には、旧羽地村の各字出身の名前と住所や電話番号が記載されている。合計168世帯の登録があり、その中で、80歳以上は25名で、登録代表者の約

30%にあたった。

会誌には、クラブの目的として、以下の2つの目的が挙げられている。まず、「会員やその家族同士の親善を深める」、次に、「会員やその家族の葬式に関する連絡や支援」である。それらは、現在においても、変わらない。また、1970年当時の羽地クラブの資料によると、字、区長といった名称の役職もあり、理事から任命されることになっている。クラブの活動として、毎年開催されるピクニックや新年宴会が1970年も行われていた(写真1)。



写真1 ハワイ羽地人会ピクニック カピオラニ公園にて(1955年)(提供: Rodney Inafuku氏)

現在のクラブの活動は、年一回開催されるピクニックや新年宴会、沖縄を訪問するスタディーツアーの実施や交換留学の支援などがある。組織体制には、会長以外にも、3名のアドバイザーが存在する。羽地には13の字が存在するが、クラブにおいて、その字出身の代表が区長として運営組織の一員になっている。

羽地クラブの2014年の新年宴会には筆者も参加したが、ハワイ沖繩センターの多目的ホールで開催され、午後5時から午後10時まで行われた(写真2)。10人掛けの17テーブルが用意され、170席が確保されていた。そのうちの15テーブルが埋まっていたため、およそ150名の参加があった。テーブルは、家族単位で着席し、来賓は来賓用のテーブルに着席する。参加する家族は90代の方もおり、祖父母、父母、子供などといった3世代で参加している。しかし、参加しているのは、50代以上が大半を占め、30代、40代はほとんどいない。プログラムには、先亡者への黙とうの儀式があり、それは一世や二世など歴代クラブ会員の冥福を祈るものである。また、前年の沖繩フェスティバル、スポーツ大会やピクニックなどの年間行事の総括と報告、そしてその年の行事計画の報告がある。また、スタディーツアーや交換留学についての報告や余興があり、伝統芸能の実演や個人・家族での演奏で宴会が進行する。その他、うちなーぐちによるビンゴゲーム(写真3)や参加者全員によるエーデルワイスの合唱もある。これらの活動は、郷友会としての結束を維持するものである。



写真2 羽地クラブの新年会の様子



写真3 うちなぐちビンゴゲーム

3 「羽地クラブ」 成員のライフストーリー

(1) 調査方法

現在、「羽地クラブ」に所属する成員はクラブとどのように関わり、また祖先の故郷である母村とどのように繋がっているのだろうか。本研究の課題を考察するために、羽地地域にルーツを持ち、クラブに所属している5名にインタビューした。オアフ島にあるハワイ沖縄連合会およびハワイ大学沖縄研究センターの協力を得て、スノーボーリング方法でインタビューの対象者を決め、インタビュー調査を依頼した。世代や年齢、ジェンダーに偏りのないよう努めた。

インタビューは、ハワイ沖縄連合会の事務所があるハワイ沖縄センターやレストランで行った。インタビュー対象者に場所と時間を指定してもらい、約一時間から一時間半の時間で行った。インタビューでは、あらかじめ質問事項を準備したが、できるだけ各自が語りたいことを重視し、日本語および英語を混ぜ、家族の移民の歴史や、生い立ち、郷友会との関わりや郷里との繋がりについて自由に語ってもらった。ハワイ生まれ二世で男性のA氏とハワイ生まれ三世で男性のC氏のインタビューは英語で行われた。また、羽地村で生まれ戦後ハワイに移住した女性でB氏および四世と同じ世代で30代前後のD氏とE氏のインタビューは日本語で行われた。本稿では、英語のインタビューを筆者らが日本語に訳したものを掲載している。

インタビュー調査では、社会学の質的調査方法の一つであるライフストーリーを用いた。ライフストーリー研究者の桜井厚(2007)は、ライフストーリーを「自己の構築をめぐる社会的交渉の一環」(桜井2007: 210)として定義している。つまり、ライフストーリーとは、自己を表現するのに必要な出来事や体験を選択し、自己のストーリーを、語り手との相互行為を通して構築するものであると定義する。桜井厚のいう「対話的構築主義アプローチ」を用いることによって、過去の出来事や経験を知るだけでなく、ハワイの郷友会との関わりと郷里との繋がりの中で、どのように自己を見出しているのかを

考察することができる。

ここでは、5名のライフストーリーを紹介する。彼らのライフストーリーから、異なる世代の成員がそれぞれの家族の歴史や個人的な経験にもとづいた郷友会との関わりと郷里との繋がりを持っていることが明らかになる。本稿では、プライバシーに配慮して、個人名の使用を控えた。

(2) 「価値を育んだ場所」, 「人生の源泉」としての羽地

ハワイ生まれ二世で男性のA氏は、1916年に旧羽地村田井等からプランテーション労働移民として移住した父親と旧羽地村で幼馴染だった母親との間にカウアイ島で生まれた。両親のより良い教育の機会を与えたいという思いから、6歳の時に家族でカウアイ島からオアフ島ホノルルに移住した。インタビューでは、養豚業を営む父親を助けながらハワイ大学に就学したこと、朝鮮戦争で前線部隊として従軍したこと、G Iビルでジョージ・ワシントン大学の法科大学院を卒業しハワイ州の高等裁判所やハワイ州の判事として仕事をすることを語った。

米国国籍を取得できなかったA氏の父親は、「米国で生まれたのだから米国に忠誠であるべき」とA氏に言っていたという。1945年12月7日、日本軍による真珠湾攻撃を高台から目の当たりにするが、その時の様子を以下のように語っている。

いつものように朝5時、5時半頃から豚の餌の残飯を集めに出かけていて、攻撃があった8時頃、黒い煙が見えたのを覚えています。ただの演習ではないとすぐに分かりました。(中略)カリヒバレーの高台から真珠湾の方を見てみると、3つの日本軍の飛行機が見え、攻撃を目の当たりにしました。(中略)我々は米国人だから攻撃されたくないという強い気持ちがありました。

米国に忠誠を示し、米国人として朝鮮戦争の前線に従軍したA氏は自らの戦争体験については、「昔のことだ

から」と多くを語らなかつた。戦後、父親の後押しで、G Iビルを貰い、ジョージ・ワシントン大学の法科大学院で学んだが、父親は、8名の子供を養っていたため、両親には経済的な面で支援を求めず、一日朝と夜の二回だけの食事にしたり、空港で荷物を運ぶ仕事など様々な仕事をしながら学費や生活費を得たり、さらにお金が足りないときは、タイプライターを質屋に売って、なんとか生活をしていたという。司法試験に合格し、ハワイ州の高等裁判所で採用され、1958年から1964年まで市の行政法務事務所で勤務し、1964年からハワイ州の判事として勤務した。

経済的に困難な生活を送りながらも、ハワイ社会において判事として土台を築いたA氏は、当時について、「やるべきことはやる。我慢する。」という父親の教えがあったから出来たことだと振り返る。父親は経済的理由から高校に行くことができなかったが、ハワイの養豚業者協会の会計も務めた経験もあり、頭の良い人であったという。父親から生きていく上で大切な価値観や色々なやり方を教えてもらったという。A氏は、「両親や祖先がいたから、今我々が生きている。彼らの教えや価値は自分に受け継がれ、自分の価値となる。それが次の世代にも受け継がれる」と語った。郷里である羽地には、1978年に父親と一緒に訪ねたことがあり、貢献したいという気持ちから、羽地クラブの会長を10年間務めた。

次に、A氏と同じ世代ではあるが、羽地村の仲尾次で生まれ戦後ハワイに移住した女性のB氏は、インタビューの中で、沖縄戦体験や戦後の経験、小学校の思い出、郷里への想いを語った。B氏の両親は、元々那覇市出身であったが親戚が経営する店を引き継ぐために羽地に移り、そこで生まれ、小学校の高学年までの約12年間を羽地で過ごした。

B氏は、「歴史のよくぞ大変なときに生まれた」と振り返り、幼少時代について、親戚からもらった防空頭巾を被って学校に通ったこと、防空壕で潜んで母親が作ったおむすびを食べたこと、姉たちは竹やりで棒を習い、B氏は信号旗を習ったことを語った。沖縄戦は、3か月以上は山の中で過ごし、ホームレスのような生活をしていたという。料理をするために枯れ木を集めるのがB氏の仕事だった。また、B氏は、山中での避難生活中に幼い妹を栄養失調で失った。終戦は収容所の中で迎えた。戦後は、食べ物がなく母や兄たち、姉たちは大変な思いで夜こっそり日々の食べ物を探しに出かけていたのを覚えている。戦後は何もなくて、髪の毛を洗うために、ハイビスカスの葉っぱを泡立てて髪を洗い、また風邪をひいた時や目が真っ赤になった時には、フーチバー（ヨモギ）などの葉草を用いていた。「どんなものを食べたって、あの時よりは美味しく感じる」とその当時の厳しい生活環境を振り返った。

貧しい戦後の生活を経験した一方で、小学校の思い出は、今でも「人生の源泉」として心に残っているという。B氏が通った小学校は、テント屋に机を入れた簡易な造りであった。それでも放課後、先生がいつも生徒と遊んでくれて、一緒にドッジボールやキャッチボールをしたことがとても楽しく、5年生頃から将来は教師になるという夢を強く抱くようになったという。4年生から英語を習ったが、初めて覚えた言葉は今でも忘れられないという。「泡のあーぶっくー（泡）は本、A bookなのよ」と楽しく学んだことを振り返る。6年生の時は、じーまーみー（落花生）を植えたり、自分達でお米を作ったり、みーぐーみ（新米）でおむすびを作って6年生皆で食べたりした。中学校からは那覇に移ったが、那覇の中学校、高校の作文はみんなその小学校の思い出について書いたという。

那覇で義務教育を終え、銀行員になった後も3年間の通信教育によって単位を取得、貯金をし、慶応義塾に1年間就学をして卒業した。その後、ハワイ大学で日本語教育（応用言語学）の修士号を取得し、教育学の博士号を取得した。卒業後は、ハワイ大学で教鞭を執りながら生活の土台をハワイに築いた。義母にも助けてもらいながら、一人の子供を育て仕事との両立をした。

退職した現在、羽地クラブのためにうちなぐちの講師のボランティアや日本の芝居に沖縄の文化を取り入れる脚本を手助けするなどして貢献している。現在、「人生の源泉」であると称する母村羽地に家族を連れて行き、母校の小学校での講演をしたり、古い友人との繋がりを持っている。郷里である羽地への想いを以下のように表現する。

いつまでも心に残る、人生のむうーとう（元）。これとっても大事ですよ。いい所です。うちの兄が言ったのです、「僕らは良かったね。あんな何の汚れもない純粋なあっちで生まれて良かったね」と。感謝ですよ、それも。（中略）いつも感謝していますね、自分の心の故郷はやっぱりそこ。強いですよ、それは、消えてなくならないですね。

B氏は、教師になる夢を育んだ母村羽地とは「人生の源泉」として繋がり、教師としての地位を築いたハワイでは、羽地クラブのために沖縄の言語や文化を教える教師として関わっている。

A氏とB氏のライフストーリーからは、戦中や戦後の困難な時代を生き、教育を受け、ハワイ社会で判事や教員として生活を築いていったことが分かる。A氏にとって、郷里である羽地とは「父親から教わった価値が育まれた場所」であり、B氏にとっては、「人生の源泉」である。それぞれがどのように戦時期を生き、戦後どのよ

うな教育を受け、こういった形で土台を築いたかによって、現在の郷友会との関わりと郷里との繋がりが体现されることを示している。

(3) 「自己のルーツを見出す場所」としての羽地

C氏は、ハワイ生まれ三世で男性である。戦後生まれであるため、A氏やB氏のように戦争体験はない。インタビューでは、幼少時代からの羽地クラブと関わり、母村羽地への訪問やそこでの経験、ハワイ沖繩連合会会長としての経験を語った。

C氏は幼い頃から、毎年開催される羽地クラブのピクニックや新年宴会に家族で参加していたが、羽地についてはあまり理解していなかった。ハワイの沖繩系郷友会には市町村別のスポーツチームが存在するが、高校三年生の時に羽地クラブのソフトボールチームに参加した。カネシロ、タマシロ、ミヤシロ、シマブクロといった沖繩の名字を持っている人たちと、同じ沖繩の人であるという朋友性を持つ程度であった。実際に羽地を意識し始めたのは、クラブのスポーツ活動の一環として初めて沖繩を訪ね、羽地の親戚と実際に会った時であると振り返る。祖父も歩いたであろう道を自分も実際に歩いた時に強い衝撃を受け、祖父が家族のより良い生活のために自分を犠牲にしたものが何だったのか分かったという。祖母方の家に行った時に、ハワイの父や叔父や叔母の写真があり、その時にハワイの家族が羽地に写真を送っていたのだと分かった。また、羽地の親族にとってそれらの写真がとても大事で、それらをラミネートしているのを知り、ハワイの親族のことをどれだけ誇りに思っていたかが分かった。その時に自分の親族についてもっと学ぶべきだと思った。当時のことを次のように振り返る。

親族とはこれからも関係を続けていきたい。(中略)自分が日本語を喋れないのを少し恥ずかしく思うが、羽地の親戚と会った時、彼らも片言の英語を喋り、私も分かるだけの日本語を喋り、どうにかしてコミュニケーションを取ることができた。お互いに敬意を払い、そこに一緒にいることの楽しみを感じた。

C氏は、幼い頃に羽地クラブの新年宴会やピクニックで親戚に会っていたが、誰が誰だか分らなかったという。だからこそ、父や祖父が自分のルーツについて教えてくれたことについて感謝しており、その気持ちを以下のように語った。

「羽地」がどういう意味なのか分からなかった。祖父や祖先の出身地で、小さな村であるというようなことは知っていたが、沖繩のどこにあるか、農村であるか、都会であるかさえ知らなかった。(中略)

子供の時は、当たり前のように捉えていたが、祖父と父が彼らなりのやり方で自分たちの来た道と祖先について少しだけ教えてくれたことに、本当に感謝をしないといけないと思っている。

また、羽地クラブは「人生のサイクル」であり、家族のようなものであると語る。子供の頃一緒に育った人たちが、大人になってお互いの子供も知るようになる。人生の中で同じ時間を過ごし、友情や絆が生まれ、共通の絆は羽地クラブだからできたと振り返る。

大学卒業後にイオラニ学校で仕事をし、ハワイ沖繩連合会で過去5年の間にリーダーシップを取るようになった。ハワイには沖繩系の人が大勢いるが、沖繩について知らないし、沖繩の人であることがどういう意味を持つのかを分からない人が多い。若い世代には、三線、エイサーや踊りなどの伝統芸能に触れるなど、沖繩の事を学んでほしいと考える。現在、ハワイ沖繩連合会の会長としてハワイの沖繩系郷友会と関わっている。会長となった今、自分のルーツについて以下のように語った。

ここにいるのは何かしら理由があると思うようになった。(中略)18歳でその国の言葉も話せない国に行くというのは考えられないことであり、それは大きな勇気があること。自分が18歳の時にハワイや米国から異国に行くことは絶対できなかった。(中略)彼らがそうしていなければ、私はここに座っていなかっただろう。

C氏のライフストーリーからは、羽地クラブとの関わりが幼い頃からあり、実際に羽地を訪ね親戚に会った経験から自分のルーツを発見することができたことが分かる。現在では、ハワイの郷友会の活動を支え、また自分が経験したように、実際、羽地に行って親戚に会い、沖繩の事を知ることができるスタディーツアーを企画し実施できるようにしたいと思っている。また、ハワイ沖繩系図協会 (Okinawa Genealogical Society of Hawaii)²⁰⁾と連携し、祖先がどこから来たかをリサーチできるような取組もできるようにしたいと思っている。C氏にとって、羽地とは、「自己のルーツを見出す場所」であり、自分の羽地での経験を沖繩県系人や家族にもしてほしいと願う。C氏は二世が築いたものの中から、自分のルーツを見出し、ハワイの郷友会や羽地クラブをリードする世代として、築かれたものを継承・継続しながら、郷里とのさらなる交流を目指す活動に取り組んでいる。

(4) 次世代としての自覚と新しい「繋がり」への取り組み

D氏とE氏は四世と同じ世代で30代前後の姉妹であ

る。両親は羽地出身で二人ともハワイで生まれた。父は糸満の高校を卒業し、21歳くらいの時に漁師になるためハワイに移住した。D氏とE氏は、家族で帰郷した羽地での思い出、沖縄芸能の取り組み、羽地クラブや沖縄のコミュニティーの存続の懸念、現在の活動について語った。

E氏が小学校4年生になる頃まで、毎年夏休みは母と兄弟3人で沖縄を訪問し両親の故郷である羽地に帰っていたという。羽地の古我知の川は、昔は水が綺麗で、川から海が近かったので、潮が引いた時に下りて、カニを捕ったりとか魚を釣ったりした思い出がある。小さい頃は、母親の影響で二人とも琴を習っていたが、練習が嫌で二人とも辞めたという。琴の代わりに、D氏は沖縄の舞踊を始め、E氏は沖縄のエイサーをするようになった。D氏は大学を卒業した後、沖縄県が支給する奨学金を得て、沖縄県立芸術大学に一年間の留学をした経験があり、その後も舞踊の稽古や試験を受けるために沖縄へ行っている。E氏も、短大を卒業した後、エイサーの稽古のため二年に一回のペースで沖縄を訪ねているという。羽地にあった祖母の家は工事で立ち退きになり、祖母が首里に引っ越しているため、羽地に帰ることはなくなった。

ハワイの羽地クラブには、両親が所属していたが、あまり積極的に行事には参加していなかった。しかし、二人が高校生になった頃から、羽地クラブに所属していることで恩恵を受けた時から、積極的にクラブの行事に参加するようになったという。二人とも4年ほど前からクラブのエンターテイナーとして、エンターテインメントのプログラムを作成する役割を担っている。プログラム作成の役割は、親戚の叔母さんが担っていたが、もう高齢になり、他に若いメンバーはいないため、二人が引き受けたという。

現在、D氏もE氏も羽地クラブのエンターテイナーとして、クラブが主催するイベントのプログラム作成を担当している。ハワイ沖縄連合会や市町村のクラブに所属していない若い世代が多くいることを感じ、彼らに沖縄のことを教えたいという強い気持ちを持っている。D氏とE氏は、新しいエイサーのグループである「ちなぐエイサー」を設立し、その代表者として活動している。エイサーのグループの名前は、「絆」と書いて、「ちなぐ」と呼ぶ。名前の由来について、以下のように語る。

「絆」という言葉が沖縄の言葉にはないから、三線を教えている先生に相談してみたら、「繋ぐ」は「ちなぐ」になるけど、どうかということで、「ちなぐ」エイサーになった。(中略)「ちなぐ」は世代間のコネクションでもあり、沖縄とハワイのコネクション、そして自分と文化のコネクションという意味がある。

「ちなぐ」エイサーは創作エイサーで沖縄の那覇太鼓が基本だったが、今年から熱心に一週間に一回集まってエイサーを創る作業をしている。

一方で、E氏は、若い世代が沖縄連合会の県人会の活動やボランティアに参加するきっかけを作ることを目的に、「シンカ」という新しいクラブを2015年7月に設立した。「シンカ」には沖縄の言葉で「仲間」や「チーム」という意味がある。また日本語でも「進化」という意味がある。20代から30代までの四世、五世の25名のメンバーで構成されている。D氏はハワイの四世、五世について以下のように語る。

四世、五世はローカルになっている。自分が沖縄と分かるのは苗字から沖縄かもという人がいるくらい。それか全く沖縄とも思っていない人もいる。知り合いの友達は、沖縄の踊りを見ても、何なのあの踊りは、みたいな。衣装見ても何なのそれっていう反応しかやっぱり戻ってこない。踊りがあるよって言っても、やっぱりそれは魅力の一つではない。日本語も分からないから、歌を聴いても分からない。やっぱり、この世代は飲み会とか出会いの場という名目に一番魅かれるのではないかな。

沖縄のコミュニティーに全く関わりがなく、また沖縄の事を知らない人でも、沖縄の食べ物や歴史に興味がある友人がいるため、堅苦しい会合ではなく、気楽に参加できる「チャンプルーナイト」をしたりすることで、新しい人たちと繋がりを持つことができるとD氏は語る。最終目標は皆で沖縄にツアーに行くことである。「シンカ」というクラブをハワイだけではなく、沖縄やブラジルなどにも創り、国境を越えて県系の若者と交流ができるようにしたいというのが目標であるという。

「シンカ」を創立した背景には、ハワイにおける羽地クラブやハワイ沖縄連合会の存続、広く言えば沖縄コミュニティーの維持を懸念する気持ちがあるからだと言っている。その気持ちをE氏は以下のように語った。

自分がおばあちゃんになっても、沖縄コミュニティーがあってもほしいから、今から始めないとなくなるから、どうにかしようと思っている。やっぱりオキナワ・フェスティバルが好きだし、コミュニティー自体が好き。どんどん、皆おばあちゃんになって亡くなっていつているから、今からうちの世代が続けて行かないと、十年どうなっているか、少しずつそれを若い人たちが背負っていかなくてはならない。

「シンカ」はハワイ沖縄連合会に新クラブとして加盟

して、活動を始めたばかりである。

D氏とE氏のライフストーリーからは、彼女たちが母村羽地には両親と祖父母の出身地として幼い頃から帰っていたという経験がある一方で、羽地クラブとは芸能を通してエンターテイナーとして関わり、ハワイにおける沖縄コミュニティの存続を目的とした活動に取り組んでいることが分かる。また、ハワイや郷友会に限定されない広義の「沖縄」についての新たな繋がりを創る活動にも取り組んでいる。そこには一世や二世、三世が維持・継承してきた伝統には縛られない、四世と五世による自発的な自己と文化の維持・継承と新たな創造の活動がある。

おわりに

羽地クラブのメンバーのライフストーリーからは、先行研究で示された郷友会の相互扶助 (Kimura 1968) や「コミュニティとしての郷友会」(川和 2006) とその多元的な社会機能、「リーダーとしての自己を確立する場」(Okamura 1983) としての役割もさることながら、異なる世代のメンバーによるそれぞれの家族の歴史や個人的な経験にもとづいた多様な郷友会との関わりや郷里との繋がりが、顕在化してきていることがわかる。

今日のグローバル化に伴い、人やモノ、情報が国境を超えている現在、郷里と海外移住地域とのトランスナショナルな繋がりの度合いも強くなっている。このような中で、自分の祖先の出身市町村を訪問するスタディーツアーの実施も始まり、また移住地から郷里への還元的な人の移動も盛んになり、両地域を行き来する経験を持つ人々も少なくない。

本研究は、ハワイにおける羽地郷友会の5名のメンバーに焦点をあてたが、沖縄からの出移民は、フィリピン、ミクロネシア、シンガポール、中国、キューバ等の広範囲に及ぶ。今後は、他国や地域における様々な郷友会のメンバーがどのような背景で結束し、地元の郷友会と関わり、郷里と繋がっているのかについて、その多様性をさらに考察をしていく必要がある。

謝辞

本稿は、名桜大学総合研究所学際的共同プロジェクト研究「沖縄北部地域出身の海外沖縄移民に関する総合的研究」助成金を頂き、2014年2月および2015年3月に実施したハワイ現地調査にもとづき執筆したものです。現地調査を実施するにあたり、ハワイ沖縄連合会、ハワイ大学沖縄研究センター、羽地クラブの関係者の皆様からご協力を頂きました。また、ハワイ大学沖縄研究センターのジョイス・チネン教授や名護市教育委員会文化課市史

編さん係の波平聡氏には、研究に関する助言や本研究関連資料収集の面でご協力を頂きました。ここに深くお礼申し上げます。

[注]

- 1) 石川友紀 (1988: 9) を参照。
- 2) 石川氏は海外における沖縄出身者移民の歴史と実態について多くの論文を出版しており、特に地理学的研究については、石川 (2003) を参照。
- 3) 例えば、白水 (1998) のハワイの沖縄系コミュニティの歴史や1980年代のハワイにおいてウチナーンチュアイデンティティが活性化したプロセスやその要因についての研究がある。また、トランスナショナルアイデンティティの側面からハワイのウチナーンチュのアイデンティティを考察したUeunten (1989), Shirota (2007), Arakaki (2007) 等の研究がある。
- 4) 例えば、Stewart and Yamazato, eds. (2009) や山里勝己・石原昌英編 (2013) 等のオキナワ系アメリカ人文学についての研究がある。
- 5) 例えば、国頭村、金武町、具志川市、北谷町、北中城村、西原町、玉城市の市町村が出稼ぎや移民に焦点をあてた市町村史を刊行している。
- 6) 1946年に、羽地村から屋我地村が分村し、1970年に羽地・屋我地・屋部・久志の旧4村と名護町が合併し名護市になった。『名護市史 本編11わがまち・わがむら』(1988: 373) を参照。
- 7) ディアスポラの概念についての基礎的な研究書としてCohen (1997) を参照。
- 8) Okamura (1983: 341-353) を参照。
- 9) 石原昌家 (1986: 21) を参照。
- 10) 琉球新報社編. (1980) 『郷友会』を参照。
- 11) Kimura (1968: 286-88) を参照。
- 12) ハワイ沖縄連合会 (Hawaii United Okinawa Association) は設立した1951年から1972年まで、ハワイ沖縄人連合会 (United Okinawan Association of Hawaii) という名称であったが、1972年にハワイ沖縄県人連合会 (Hawaii Okinawa Association) に改称し、また、1995年に現在の名称に変わった。川和 (2007: 62) は、ハワイにおけるウチナーンチュの社会組織には、「市町村レベル」と「沖縄県全体のレベル」の二つのレベルがあり、前者には郷友会、後者にはハワイ沖縄連合会が該当することを述べている。
- 13) 帰米二世とは、米国で生まれたが、幼少年期を日本で育ち日本で教育を受け、戦前もしくは戦後、再び米国へ帰ってきた二世のことを言う。ハワイの沖縄系帰米二世についての研究は前原 (2006) を参照。
- 14) 石川 (1989: 20-23) を参照

- 15) 名護市史編さん委員会, 2008, 『名護市史本編・5 出稼ぎと移民Ⅰ』77頁を参照。
- 16) 石川 (1974: 71) を参照。
- 17) 石川 (1974: 65) を参照。
- 18) 名護市史編さん委員会, 2008, 『名護市史本編 5 出稼ぎと移民Ⅱ 出稼ぎ=移民編 (上)』16頁を参照。
- 19) *Hawaii Pacific Press*, February 1, 1978
- 20) ハワイ沖縄系図協会 (Okinawan Genealogical society of Hawaii) は, ハワイ沖縄連合会の準加盟組織として活動している。

[引用文献]

- Arakaki, Makoto, [2002] 2007, "Hawaii Uchinanchu and Okinawa: Uchinanchu Sprit and the Formation of a Transnational Identity," Ronald Y. Nakasone, ed., *Okinawan Diaspora*, Honolulu: University of Hawaii Press, 130-141.
- Arakaki, Robert K., [2002] 2007, "Theorizing on the Okinawan Diaspora" Kiyoshi Ikeda and Joyce Chinen eds., *Uchinaanchu Diaspora: Memories, Continuities and Constructions*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- Cohen, Robin, 1997, *Global Diasporas: An Introduction*. Settle: University of Washington Press.
- Hawaii Pacific Press*, February 1, 1978.
- Haneji Club 1970*.
- 平敷令治, 1977, 「ブラジル移民の出自—名護市字仲尾次出身者の事例—」『沖縄国際大学文学部紀要』5 (2): 2-15.
- 石川友紀, 1974, 「第一章 総説」『沖縄県史 7 移民』沖縄県教育委員会, 3-87.
- 石川友紀, 1989, 「沖縄県国頭郡旧羽地村における地割制の廃止と出移民—字仲尾次を事例として—」『資料編集室紀要』14: 1-34.
- 石川友紀, 2003, 「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究—一世の地域的分布と職業構成を中心に—」『歴史地理学』45 (1): 72-85.
- 石川友紀, 2005, 「沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論」『移民研究』創刊号, 11-30.
- 石原昌家, 1986, 『郷友会社会—都市のなかのムラ』(ひるぎ社)
- 石原昌家, 1977, 「移民の生活歴と送出地との関係—予備調査報告—」『沖縄国際大学文学部紀要』5 (2): 46-54.
- 川和清太郎, 2007, 「ハワイ沖縄系郷友会の占める場所—ハワイ・ウチナンチュの社会的ネットワークをめ

- ぐって—」『移民研究年報』13: 59-77.
- Kimura, Yukiko, 1968, "Locality clubs as basic units of the social organization of the Okinawans in Hawaii," *Phylon*, 29 (4): 331-338.
- 前原絹子, 2006, 「To Okinawa and Back Again: ハワイの沖縄系帰米二世のライフストーリー」『移民研究』2: 23-42.
- 名護市史編さん委員会編, 1988, 『名護市史本編・11 わがまち・わがむら』名護市役所.
- 名護市史編さん委員会編, 2008, 『名護市史本編・5 出稼ぎと移民Ⅰ』名護市役所.
- 名護市史教育委員会編, 2008, 『名護市史本編・5 出稼ぎと移民Ⅱ 出稼ぎ=移民編 (上)』名護市役所.
- 波平勇夫, 1977, 「村落の階層分化と海外移住者の形成—名護市仲尾次部落を中心として」『沖縄国際大学文学部紀要』5 (2): 36-45.
- Okamura, Jonathan Y. 1983. "Filipino Hometown Associations in Hawaii" *Ethnology*, 22 (4): 341-353.
- Ruth Adaniya, [1981] 2002, "Okinawan Locality Clubs in Hawaii Today," *Uchinanchu: A History of Okinawans in Hawaii*. Honolulu: University of Hawaii Press. 292-296.
- 琉球新報編『郷友会』琉球新報社 1980
- 桜井厚, 2007. 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- Shirota, Chika, 2007, "Women-Centered Diasporic Memories/Dancing Melodies: Life stories across post-war Okinawa, Hawaii," Ikeda Kiyoshi and Joyce Chinen eds, *Uchinaanchu Diaspora: Memories, Continuities and Constructions*, Honolulu: Hawaii. 176-195.
- 白水繁彦, 1998, 『エスニック文化の社会学—コミュニティ・リーダー・メディア』日本評論社. Stewart, Frank and Katsunori Yamazato, ed., 2009, *Voices from Okinawa*. Honolulu: University of Hawaii.
- 平良盛吉・川上清栄, 1962, 『羽地村字親川郷土誌』
- 棚原健次, 1977, 「ブラジル移民に関する心理学的研究」『沖縄国際大学文学部紀要』5 (2): 16-35.
- Ueunten, Wesley. 1989. *The Maintenance of the Okinawan Ethnic Community in Hawaii*. Master Thesis, Honolulu: University of Hawaii.
- 山里勝己・石原昌英編, 2013, 『“オキナワ” 人の移動, 文学, ディアスポラ』彩流社.